

# 山の手小景

泉鏡花

青空文庫



やらいちやう  
矢來町

「お美津、おい、一寸、あれ見い。」と肩を擦合はせて居る細  
 いくんよ 君を呼んだ。旦那、其の夜の出と謂ふは、黄な縞の銘仙の袴  
 しろちりめん 白縮緬の帯、下にフランネルの襯衣、これを長襦袢位に心  
 うろえ 得て居る人だから、けばくしく一寸着して、羽織は着ず、  
 ステツキ 洋杖をついて、紺足袋、山高帽を頂いて居る、脊の高い人  
 物。

なん  
「何ですか。」

と一寸横顔を旦那の方に振向けて、直ぐに返事をした。此

の細君が、恚う又直ちに良人の口に應じたのは、蓋し珍しいの  
で。……西洋の諺にも、能辯は銀の如く、沈黙は金の如し  
とある。

然れば、神樂坂へ行きがけに、前刻郵便局の前あたりで、  
水入らずの夫婦が散歩に出たのに、餘り話がないから、

(美津、下駄をかうてやるか。)と言つて見たが、黙つて返事を  
しなかつた。貞淑なる細君は、其の品位を保つこと、恰も  
おほまがき大籬の遊女の如く、廊下で會話を交へるのは、  
思つたのであらう。

(あゝん、此のさきの下駄屋の方が可か、お前好な處で買へ、あゝ  
ん。)と念を入れて見たが、矢張黙つて、爾時は、おなじ横

顔こがほを一寸背ちよつとそむけて、あらぬ處ところを見た。

丁度ちやうど左側ひだりがはを、二十ばかりの色いろの白しろい男をとこが通とほつた。旦那だんなは

稍濁やたごつた聲こゑの調子てうしだか高たかに、

(あゝん、何どうぢや。)

(嫌いやですことねえ、)と何なにとも着つかぬことを謂いつたのであるが、

其間そのかんの消息せうそおのづか自しんら神契しんけい默會もくくわい。

(にやけた奴やつぢや、國賊こくぞくちゆう!)と快こゝろよげに、小指こゆびの尖さきほどな

黒子ほくろのある平ひらたな小鼻こぼなを蠢うごめかしたのである。謂いふまでもないが、此こ

のほくろは極きはめて僥倖げうかうに半なかば髻ひげにかくれて居ゐるので。さて銀ぎん

側の懷くわい中時計ちゆうどけいは、散策さんさくの際さいも身みを放はなさず、件くだんの帶おびに卷着まきつ

けてあるのだから、時ときは自分じぶんにも明あきらかであらう、前さきに郵便局いうびんきょく

の前まへを通とほつたのが六時ろくじ三十分さんじつぷんで、歸かへり途みちに通とほり懸かつたのが、  
十一時じふいちじ少せう々く過すぎて居ゐた。

夏なつの初はじめではあるけれども、夜よるの此この時じぶん分に成なると薄うすら寒さむいの  
に、細さい君くんの出では縞しまのフらンネルに絲いと織おりの羽は織おり、素す足あしに踏ふみ臺だい  
を俯うつ着つけて居ゐる、語ごを換かへて謂いへば、高たかい駒こ下ま駄たを穿はいたので、  
悉くはしく言いへば泥どろほつくり。旦だん那なが役やく所しょへ通かよふ靴くつの尖さきは輝かがいて居ゐ  
るけれども、細さい君くんの他よ所そ行いきの穿はき物ものは、むさくるしいほど泥どろま  
塗ぬれであるが、惟おもふに玄げん關くわん番ばんの學がく僕ぼくが、悲ひ憤ふん慷かう慨がいの士し  
で、女をんなの足あしにつけるものを打うつ棄ちつて置おくのであらう。

其その穿はき物ものが重おもいために、細さい君くんの足あしの運はこび敏びん活くわつならず。  
が其それの所せ爲ゐで散さん策さくに怍かる長ちやう時じ間かんを費つひしたのではない。

もつと 神樂坂を歩行くのは、細君の身にとつて、些とも樂みなことはなかつた。既に日の内におさんを連れて、其の折は、二まいあはせ ながじゆばん 小紋縮緬三ツ紋の羽織で、白足袋。何のたぬか 深張傘をさして、一度、やすもの賣の肴屋へ、お總菜の鰯を買ひに出たから。

みやうがだに  
茗荷谷

「おう、苳だ苳だ、飛切の苳だい、負つた負つた。」  
小石川 茗荷谷から臺町へ上らうとする爪先上り。兩側が大藪があるから、俗に暗がり坂と稱へる位、竹の葉の空

を鎖して眞暗な中から、烏瓜の花が一面に、白い星のやうな瓣を吐いて、東雲の色が颯と射す。坂の上の方から、其の苺だ、苺だ、と威勢よく呼はりながら、跣足ですたくと下りて来る、一名の童がある。

嬉しくツてく、雀躍をするやうな足どりで、「やつちあ場

ア負つたい。おう、負つた、負つた、わつしよいく。」

やがて坂の下口に来て、もう一足で、藪の暗がりから茗荷谷へ出ようとする時、

「おくんな。」と言つて、藪の下をちよこくと出た、九ツばかりの男の兒。脊丈より横幅の方が広いほどな、提革鞆の古いのを、幾處も結目を拵へて肩から斜めに脊負うてゐる。



これは界限かいわいの貧民ひんみんの兒こで、つい此この茗荷谷みやうがだにの上うへに在ある、  
 補育院ほいくゐんと稱となへて月謝げつしやを取とらず、時ときとすると、讀本とくほん、墨すみの類るゐ  
ほどこしでが施ほに出でて、其上そのうへ、通學つうがくする兒この、其その日暮ひぐらしの親達おやたち、父ちち  
ゝおや親おやなり、母親は、おやなり、日ひを久ひさしく煩わづらつたり、雨あめが降ふりつゞ續つゞいたり、  
きうきやうめ窮境きうきやうめ目めも當あてられあない憂目うきめに逢あふなんどの場合ばあひには、教師けうしの  
なさけてあて情じやうで手當てだうの出でることさへある、院ゐんといふが私立しりつの幼稚園えうちゑんをかね  
せうがくかうた小學校せうがくかうへ通學つうがくするので。  
いまおほか今大塚いまおほかの樹立こだちの方ほうから颯さつと光線くわうせんを射越いこして、露つゆが煌々きら／＼  
ろばうする路傍ろばうの草くさへ、小ちひさな片足かたあしを入いれて、上うへから下おりて來くる者ものの  
みちひら道みちを開ひらいて待構まちかまへると、前まへとは違ちがひ、步ほを緩ゆるう、のさ／＼と顯あら  
やぶがめはれたは、藪龜やぶがめにても墓ひきにても……蝶々てふく／＼蜻蛉とんぼの餓鬼がきだい大將いしやう。

駄々を捏ぬて、泣癍が著いたらしい。への字形の曲形口、

両の頬邊へ高慢な筋を入れて、澁を刷いたやうな顔色。

ちよんぼりとある薄い眉は何やらいたいけな造だけれども、鬼

薊の花かとはかりすらくと毛が伸びて、悪い天窗でも撫でて

やつたら掌へ刺りさうでとげくしい。

着物は申すまでもなし、土と砂利と松脂と飴ン棒を等分に

交ぜて天日に乾したものに外ならず。

勿論素跣足で、小脇に隠したものを其まゝ持つて出て来たが、

唯見れば、目筈の中充滿に葉ながら撮んだ苳であつた。

童は猿眼で稚いのを見ると苦笑をして、

「おゝ！ 吉公か、ちよツ、」

と舌打したうち、生意氣なまいきなもの言いひで、

「おどろおどろ驚おどろかしやがいつた、厭いやになるぜ。」

苺いちごぬすは盗ぬすんだものであつた。

明治三十五年十二月



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山の手小景

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>